

北方史地资料之二

东北历史地理论著汇编

第七册 满洲历史地理

孙进己 冯永谦 马季昌 汇编

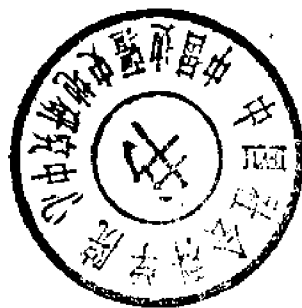
一九八七年二月

· 北方史地资料之二 ·

东北历史地理论著汇编

第七册

孙进己 冯永谦 冯季昌 编



一九八六年五月

东北历史地理论著汇编

第七册

主 办： 辽宁省社会科学院历史研究所
东北民族历史考古资料信息研究会

印 刷： 吉林省长春市人民印刷厂

辽宁省内部资料准印证（86）第087号

定价：15.80元

北方史地资料编委会

主 编 孙进己

副 主 编 冯永谦 张璇如 冯季昌
陈国良 张志立

编 委 (以姓氏笔划为序)

王柏泉 王宏刚 王禹浪
王培新 丛 军 冯永谦
冯季昌 孙进己 刘 竟
庄严(女)陈国良 陈景源
张璇如 张志立 姚义田
段新树 徐晔(女)黎久有

东北历史地理论著汇编

分册说明

- 第一册 总 论
- 第二册 先秦—隋唐
- 第三册 辽、金、元
- 第四册 明
- 第五册 清
- 第六册 满洲发达史及各地史话
- 第七册 满洲历史地理
- 第八册 日本学者有关论文
- 第九册 日本学者有关论文
- 第十册 读书方輿记要及我国近人有关论著

序

願ふに明治四十年我會社は帝國政府の付託により、滿洲の經濟的及び文化的經營の重責を負へり。而してこれらの經營が學術的基礎の上に立たざるべからざることは言を俟たず。然るに白山黑水の地は學術界に於ては未拓の分野なりき。仍て翌四十一年東京帝國大學教授文學博士白鳥庫吉氏は會社に滿洲史及びこれと密接の關係ある朝鮮史の研究を懇適したり。會社はこれを欣諾し、その研究を博士に委嘱したれば、博士は稻葉岩吉、箭内互、松井等、池内宏、津田左右吉等の諸氏を率ひ、先づ歴史の根柢たる歴史地理の検討より着手し、拮据精研、七年の歳月を費し、大正二年滿洲歴史地理二卷附圖一卷、朝鮮歴史地理二卷を完成したり。これら

の書は滿洲及び朝鮮の全朝全土に亘り、學術的にその歴史地理を闡明したるもの、權輿にして、學術界に貢獻したる功績は渺少なからざりき。爾來引繼ぎ歴史の研鑽を爲す豫定なりしも、故ありて會社は東京帝國大學と協議し、資を大學に提供し、その事業を大學に移せり。大學は大正四年以來數學士に委嘱して朝鮮史の研究に従事せしめ、凡そ毎年一回その報告を輯め、「滿鮮地理歴史研究報告」を刊行し、既に十五回に上れり。

滿洲國豎建せらるゝや、茲土研究の必要益々急切を加へ、上記の諸書を閲覽せむとするもの遽に増加したり。然れどもこれらの書は發行部數僅少なりしを以て今日は漸く稀觀となれり。因て就中最も要望の多き滿洲歴史地理二卷（中略）を重印し、以て流傳を廣めむと欲す。惟學術は日月に進歩して止まず、本書の所說中にも改變訂正を要すべきもの、少からず、既に著者自ら後出の滿

鮮地理歴史研究報告等に於て改訂したるものあり。また然らずとも其後の遺跡遺物の発見により改訂せらるべくして未だ改訂せられざるものあり。此等は本重印の際一々改訂すべきものなれども今その追なく、甚だ遺憾ながら舊版のまゝ影印に付したり。是れ惟急需に應ぜむことを庶幾へるのみ、幸に大方の諒恕を請ふ。

昭和十五年四月十五日

南滿洲鐵道株式會社

調査部長 田中清次郎

序

滿洲歴史地理の刊行せらるゝに當り、一言を卷首に題し、余等が南滿洲鐵道會社の委囑をうけて、滿韓史の研究をなすに至れる由來と、其の事業の經過とを略述せん。とす。

回顧すれば、既に六七年前となれり。露西亞戰役の局面收まりて、南滿洲の經濟的經營が我が國民によりて着手せられ、朝鮮に對する保護と開發との任務が、また我が國民の頭上に落下し來りし時、余は學術上より滿韓地方に關する根本的研究をなすの急務なるを唱説したりき。其の意蓋し二あり。一は滿韓經營に關する實際的必要よりするものにして、他は純然たる學術的見地よりするものなり。現代に於ける諸般の事業が確實なる學術的基礎

の書は滿洲及び朝鮮の全朝全土に亘り、學術的にその歴史地理を
闡明したるもの、權輿にして、學術界に貢獻したる功績は尠少な
らざりき。爾來引繼ぎ歴史の研鑽を爲す予定なりしも、故ありて
會社は東京帝國大學と協議し、資を大學に提供し、その事業を大學
に移せり。大學は大正四年以來數學士に委嘱して滿鮮史の研究
に従事せしめ、凡そ毎年一回その報告を輯め、「滿鮮地理歴史研究
報告」を刊行し、既に十五回に上れり。

滿洲國肇建せらるゝや、茲土研究の必要益々急切を加へ、上記の
諸書を閱覽せむとするもの遽に増加したり。然れどもこれらの
書は發行部數僅少なりしを以て今日は漸く稀觀となれり。因て
就中最も要望の多き滿洲歴史地理二卷(中冊は新入本)を重印し以て流
傳を廣めむと欲す。惟學術は日月に進歩して止まず、本書の所說
中にも改變訂正を要すべきもの少からず、既に著者自ら後出の滿

た之に似たるものなきにあらざるべし、これ余が滿韓に関する
學術的研究の急務を叫びたる理由の一なり。次に之を學術の上
より見るも從來秘密の幕に閉ざれたりし滿韓の地が新に我が國
民の前に開放せられたるは、學界が豊富なる研究の題材を供給せ
られたるものにして、學術に志あるものは、茲に其の新研究を試む
べき總好の機會を得たるを感ぜざるを得ざるなり。而して其の
地の事物が我が國民生活と密接の關係を有し、或は現在に於いて
我が國民の經營に委せられ、或は過去に於いて我が國民文化の要
素となりしものなるを思へば、之れが研究に従事するは、我が國の
學者の當に負擔すべき任務なるのみならず、更に考ふれば、これ亦
やがて我が國民が世界の學術に貢獻する所以の道なりといふべ
し。西歐の學者が東方の研鑽に努力せること多年、自然界の現象
より人種言語宗教學術文藝等諸般の人事に至るまで、彼等により

て其の幽の聞かれ其の微の顯はされしもの甚だ多く、而して其の地域は波斯印度の如きは言を俟たず、中央亞細亞より支那の老文明國に至り、西北利亞の曠野より安南の半島に及び、亞細亞の各地を通じて彼等が試みたる學術的研究の功績眞に驚歎すべきものあり。我が國の學者また實に之に依頼し、東洋のこと西人の教を俟つて始めて知るを得べしとす。吾人は西歐の學者に對して甚深なる尊敬と感謝との念を抱くと共に、吾人東洋の國民が世界の學術に對して爲すところ尠きを思ふて慚愧に堪へざるものあり。たゞ、滿洲及び朝鮮に至りては、其の地の僻遠なるため、西人の研究尙ほ未だ及ばざるところ多きが如し。然るに今や其の地幸にして我が學界の前に開放せられ、而して之に對する我が國民の地理上及び文化上の關係は、其の研究に特殊の便宜を與ふ。我が國の學者は、此の機を逸することなく、此の地方に於けるあらゆる事物

の研究に力を盡し、其の成績を捧げて世界の學術に貢獻せざるべからざるにあらずや。これ余が滿韓研究の急務を叫びたる第一の理由なりとす。然れども學術の研究は資を要すること多くして私人の力よく之に堪ふべきにあらず、又た相關するところ廣きに涉るを以て志を同じうするもの力を協せて之に従事するにあらずんば、其の効果を擧げんこと難し。是に於いて余は余の専攻せる史學上の研究を滿韓に向つて試み、併せて世間斯の學に志あるものに研究の便宜を供すべき何等かの方法を畫せんとし、時の文部次官澤柳政太郎氏の紹介により、之を當時の南滿洲鐵道會社總裁男爵後藤新平氏に語れり、男爵は幸に微衷のあるところを察として、之に贊助を興へんことを快諾せられ、余に委任するに滿韓史の調査を以てせらるゝに至れり。是に於いて余は四五の同志者を學界に素り、明治四十一年一月より同會社の一室に於いて之

が研究を開始せしなり。

余等の任務は、滿韓史の研究にあるも、歴史の基礎は地理にあり、而して此の地方の史的地理は殆ど未だ我國の學者に顧られず、支那人及び朝鮮人の編著また信賴するに足るもの尠きを以て、余等は先づ之を闡明するの必要なるを感じたり。然るに、上代の事蹟は、史籍甚だ乏しくして、研究に便ならざるを以て、比較的材料の豊富なる近代を先にし、其の究明せらるゝを俟つて上代に及ぼすを適當の順序なりと思惟せり。此の方針により、滿洲に關しては、第一期の研究事項を遼代以降と定め、稻葉岩吉氏は明清時代を、箭内互氏は元明時代を、松井等氏は遼金時代を分擔したるが、本書の第二卷に收めたるものは其の結果なり。此等の研究が成就するに至りて第二期に入り、松井氏は隋唐時代を、箭内氏は南北朝時代及び南北朝時代の一部を、又た稻葉氏は漢代の一部を擔任し、以て上代

の研究に移りたるが、其の成績は本書第一卷に收めたるところ即ち是なり。事、眞摯なる學術的研究に屬するを以て、些末の問題にも多大の勞力を要し、或は史料の蒐集せらるゝに従ひ、或は研究の歩を進むるに従ひ、屢變改訂正を加へざるべからざることあり、之が爲めに事業の意の如く進抄せざりし憾なきにあらずと雖も、其の間また特殊の便宜を得たることあり。朝鮮が我が保護の下に歸し、次いで我國に併合せられしたため、秘閣に藏せられし同國の史籍が漸次世に知らるゝに至り、之によりて半島及び之と交渉深き滿洲の歴史に貴重の資料が供給せられし如き、其の一例なり。從來滿韓史の研究が進歩せざりしは、半ば史料の缺乏に基けるものなれば、此等秘籍の開放によりて、斯の學はおのづから一新生面を開くに至るべし。本書に收められたる研究も固より未だ完備を以て稱するを得ずと雖も、學界の機養を拓くに多少の力を致せる

ものなるは、余等自ら之を信ぜんとす。若し夫れ大方の識者其の誤れるを訂し、其の足らざるを補ひ、以て斯學の研究を促進することあらば、獨り余等の幸のみにあらざるなり。而して本書の完成と共に豫定の計畫に基きて、歴史の研究に移りたる余等は、其の成るに従ひて之を公表し、一は以て南滿洲鐵道會社の委托に背かず、一は以て聊か世界の學術に貢獻するところあらんことを期す。

終に臨んで、余等は、宮内省圖書寮、帝國圖書館、內閣文庫、東京帝國大學圖書館、學習院圖書館及び侯爵前田利爲氏文學博士、內藤虎次郎氏等が其の所藏圖書の閱覽を余等に許されしを感謝し、又た後藤男爵の後を承けて南滿洲鐵道會社總裁の任に就かれたる中村是公氏并に副總裁國澤新兵衛氏、理事清野長太郎氏、久保田勝美氏、犬塚信太郎氏、田中清次郎氏、岡松參太郎氏、野々村金五郎氏、沼田政二郎氏及び其他の社員諸氏が、多大の同情を以て余等の研究を贊

助せられたるに對し、深厚なる謝意を表す。

南滿洲鐵道會社歴史調査室に於いて

大正二年八月

白鳥庫吉

目 次

引用書目解説		一	五七頁
第一篇 漢代の朝鮮	箭白 島 庫 互吉	一	
第二篇 漢代の滿洲	稻 葉 岩 吉	一〇三	
第三篇 三國時代の滿洲	箭 内 互	二〇四	
第四篇 晉代の滿洲	箭 内 互	二二七	
第五篇 南北朝時代の滿洲	高 内 互	二六七	
第六篇 隋唐二朝高句麗遠征の地理	松 井 等	三六〇	
第七篇 渤海國の疆域	松 井 等	四〇七	

引用書目解説

周禮

周禮の官制を論じたる政書なり、共に六禮總論は古來一定ならず、或は曰ふ周時代の作なりと、或は前漢の末葉に
出づとなす、其治國の綱紀の餘りに考證をるより推すれば後説を可とすべきが如し。

周易

聖王古の卜筮を記したるを後人の補修したるものなり、上二經十翼とより成る。その經書卷數は、共に一定
ならず。

春秋左氏傳

春秋は、紀年の風俗なり、其項目、記事者、以年敘日、以日敘時、以時敘年、所以紀事列朝同略也、故史之

を併せて春秋三傳といふ。

史記

漢の太史公が撰録す。凡べて二百三十篇。上は高帝に始まり、下は武帝の太初に至る。帝王の事蹟、諸侯の沿革、英雄の歴史、及び禮樂、刑政、天文、地理に關することを詳叙したるものなり。舊名史記とのみ、ひて、史記の稱なし。これあるは隋書經籍志に始まれば、蓋し六朝以來各名に改められしものか。梁争るに、漢の父を漢といひ、漢帝の太史なり。後世編史に志ありしも、誤さざりしが、適言して厥意を窮かしめたり。太史公自序の記す所によれば、漢の死は、元封元年(西紀前一一〇)にて、それより三年(即元封三年、西紀前一〇八)を以て、漢は支離を續ぶこととなれり。本篇は、蓋し天漢三年(西紀前九八)より以降、數年の間に撰作せられたるものと知し。本篇の材料に就き、班固は、左氏國語、世本、戰國策並びに楚漢春秋を採り。

史記の篇數の百三十篇たりしは、古來異説なし。然とも漢書藝文志の記載によれば、もの百三十篇の計、十篇は缺ありて、書なしとあり。但だ從來私家の説によれば、此十篇の缺は、元帝(西紀前四八)より成帝(西紀前二三)の間にて、褚先生之を補へりといふ。もし果して此事實をして信ならしめば、班固の時代に於て完本たるべき筈なり、若しくは、或は秘閣の原本は、褚氏補寫以前のまゝなりしものによ、共に定む難し。

史記は、劉宋の時に至りて徐廣、并發を作り、裴駰又楚漢傳を成せり。何づれも、本文と別に單行せるものととし、唐に入りては、老莊二氏の傳をとりて、之を伯夷列傳の上に置り、こは老氏が李斯氏の始祖なりといふに出でたるなり。三家本記、又大同書員によりて補作せらる。史記の篇數は、事實に於て、補史記の一編を増加せり。同時に史記を注釋せるもの、韋守節の正義あり、司馬貞の索隱あり。此等は、何れも單行せるものなるがごとし、三家注即ち裴駰

の集解、司馬貞の索隱、及び韋守節の正義を併せて分類せるは、宋の元豐時代に輯まる。略は原本の注釋體字を合併するがごとし。明の本に、凌稚隆の輯林、李光弼の増補出づ。餘者之を以て從來の諸本の大成せりとするものあれど、據るに足らず。近世正者は、釋林本を讀りて古本の壞亂極まりといへり。吾人の知る所にては、政古閣翻刻の史記は、宋版の集解單行本を原本となせるものにて、王應麟の翻刻せるは、開元正聲本を原本となせるものなり。明の監本は、又た以上二本と階次の殊るところあり。最近金陵書局にて翻刻せる史記は、集解正義索隱を以て比較的周著に各注せり。史料より觀察すれば、寧ろ金陵本を底本となすべきがごとし。金陵本は、本書の外に札記一卷を附して宋元本史記の異詞を記せり。

淮南子

漢の淮南王劉安撰す、共に二十一卷。本書は劉安の人生觀に基き世務を訓諭したるものなり。安は、元封元年に死せり。

漢書

司馬遷の史記を作ら、太初以前に限るを以て、揚雄、劉歆、褚先生、史孝山、陽城衛、馬融の徒、其後より草莽の間に至る事蹟を、各々見聞する所に由りて撰録せり。後漢光武の初、班彪といふものあり、即ち班固の父なり。諸氏が撰録せる所、文字靡俗にして、史記を次に足らざるを以て、此を修補し、旁ら諸書を採りて一書を成す。劉向歆は當時六十五篇を成せりといへり、これを漢書撰録の初となす。其字を固といふ、父の撰録の本だ一家を襲ふるを以て、更に修補の業を繼ぎ以て大成せんと欲す。其事を蓋し明帝の永平(西紀五八―七四)中より章帝の建初五年(西

紀八〇)に至るの間に著せられたものごとし、國の撰する所二十有八篇なり。唯八篇及び天文迄未だ紀らざりしを以て、和帝は、更に國の扶班郎に命じ、西域の國蕃國に就き、隨いで之を成さしめ、後復た馬續に命じて、西域に隨いて之を成さしめき、現行本百二十卷の完数は斯くして成れるもの也。

漢書を注せるものは、古來甚だ多し、劉昫は「始自西漢末、迄乎陳世、爲其注釋者、凡二十五家、於其專門要案、尙多相違」といへり、茲の本系の員録中、顏師古亦た注して上づる、宋の祥化五年、始めて之を刊行せり。

漢書補注

百二十卷、清の王先謙が、汲古閣本漢書を底本となし、古今漢書の注を合編せるものなり。

前漢地理圖

清の楊守敬撰す、共に一卷。

論衡

後漢の王充撰す、共に二十卷。本書は、王充の人生觀に著き、時季を尙論せるものなり、充は永元中卒せり。

山海經

古神話上の地理書なり。通行本は南山經、北山經、東山經、西山經、中山經の五篇山經を最古となす。蓋し前漢末に成り、漢代に著せられたる所なり。其他の各篇は後世の増補に係るべし。共に二十四編十三卷なり。

後漢書

後漢の史なり、凡べて百二十卷。内本紀、列傳九十卷は、劉宋の元嘉元年(西紀四二四)より同二十二年(西紀四四五)に至るの間に於て(劉宋時)の撰述に係る。八志、三十卷は西晉の司馬彪撰す、もと續漢書といひ、紀志傳ともに八十篇なりしを、今は三十篇を存するのみ、彪は永元元年(西紀一〇六)死没せり。通行本は范曄の紀、傳に梁の劉昫が補注せる彪の八志を合編したるものなり。

續漢地理圖(後漢郡國圖)

清の楊守敬撰す、共に一卷。

三國志

魏、吳、及び蜀の史なり。本書の編纂は、太康五年(西紀二八〇)より惠帝の初年(西紀二九〇)に至る間に成を告げり。撰者名晉の著作郎陳壽となす。本書を構成したる資料について、唐の劉知幾は王沈の魏書四十四卷、此は魏の史、華曜の吳書五十五卷、此は魏の史を挙げり。陳壽は此等の記録を基礎として六十五篇を成す、本史即ちこれなり。陳壽の死に當り、魏時に京兆の魚豢あり、魏時といふを撰したるが、事實は明帝に止まれり。其後孫盛は魏氏春秋を撰じ、王隱は蜀記を撰じ、張勃は吳錄を撰じたるなど、異聞傳出したるを以て、劉宋の文帝は、疑之に命じて、此等異聞を衆解し、以て陳壽の國史を補注せしめり、元嘉六年(西紀四二九)七月成を告ぐ。現行の三國志は即ち壽の本文に、衆注を加へたるものなり。衆注は鄭玄元の水滸注、李善の文選注の如く甚しく割裂せざるを以て六朝の書

然し却ては往によりて考辨するを得るの便あり、故之の功や至し願望の下にみちるべし。

晉書

隋書及び五朝十六國の歴史なり。凡五百三十巻、魏の太孫の景陽十八年(西紀六四四)房亮勳を著して撰す。本書は魏書の舊書を原本となし、宋魏の遺書を参考したり。本書に對する批評は唐代に於いて既に良好ならず、その舊書が文體を注する、後漢の地理記を附する、自傳易の六帖を附する、凡そ七代以前十八家の舊史を索引して本書を引かず、劉知幾は小人に悦ばれ君子には望るゝの書といへり。宋史の編に用事偶りて、圖書散佚し、即ち地理の本條のみ存す、故に後世の歴史をいふもの皆この史を本となす。實し己むを得ざるの書。

大魏三年地志

此の大魏三年(西紀二八二)に於ける州郡縣等の所屬を明にしたるものなり。撰人の名を佚す、其者は大魏三年地志と呼ばれしが、魏の沈約のごとき唯地理志といひ、後魏の地理志に地理志と云ふ、隋の地理志及び魏書は地理記といひ、唐書には地理記と云ふなり、其書は一書をいふ、地理の記によれば、本書は隋書地理志とともに、隋書に行はれ、沈約の宋書を撰じ、劉昫の魏書を注し、魏書の地理志を述べしに、所屬の州郡の書は魏書によらざれど、始するに州郡は大魏に終じたり、劉昫の地理志を注し、魏書の地理志を述べしものは一に地理志に本りり、魏の地理志のごとき、又若く其地名を撰じて魏書地理志のごときなり、今沈約の書を観るに、州郡の志は唯大魏地理志を以て大魏地理志とし、多量異同、用て地理志と云ふ、魏書の序に曰く「地理、地理を考ひ、魏、魏郡を考し、魏の世、三才を、晋又一統す、地理記の集する所又其次なり」と、此等を綜合する

に、本書は地理志とともに頗る値を置くに足るべき地志なりしが、南宋以來、全く亡失して傳らず。清の乾隆四十九年(西紀一七八四)畢沅漢書より本書の佚文を採集して一書をなせり。

晉書地理志

此の地理志なり、唐書の地理志(西紀三〇〇)王國の條に據る、一書、本書の地理志については、大魏三年地志に述ぶるところのごとし、南宋以後亡失せるが、清の乾隆四十九年(西紀一七八四)畢沅漢書の中より本書の佚文を採集せり。

西晉地理圖

此の內容敬撰す、共二一卷

十六國疆域志

五朝十六國の疆域を考證したるものなり、共十六巻、清の姚鼐撰す。

宋書

六朝宋の史なり、共に二百巻、魏の沈約の撰に據る、約は宋景平二年(西紀五二三)迄迄なり、本書は永明五年(西紀四八七)に著すし、至五年(西紀四八八)稿を成す、是れ蓋し前代即ち徐梁の宋史を編纂したるに過ぎざるを以て也、劉知幾の言に「宋明末其書散に行はる、河東魏平野東に耕りて宋書二十巻と云す、沈約見て歎まらる、吾れ漢は